記録：（港北高校　大賀　佐和子）

研修報告　歴史分科会高大連携の試み
第10回　「近世のヨーロッパをどのように学ぶか」

徳原拓哉（鶴見）福本淳（栄光）真木康彦（城北）まとめ：中山拓憲（舞岡）

神奈川県社会科部会、歴史分科会が主催するこの講座も、2017年度でついに10回目を迎えることができた。会場を貸していただいた各学校の関係者の方々、参加していただいた先生方、生徒の皆さんを集めてくださった先生方、生徒の皆さん、授業を行っていただいた高校、大学の先生方、この会を支援していただいているNPO神奈川歴史研究会等、皆様の惜しみない協力があってできたことである。特に、桃木至朗先生には、講師、コーディネイターとして、第一回からずっと係わっていただいている。総ての方に、感謝申し上げたい。

9年間アジアをテーマに行ってきたが、今回はヨーロッパ史を扱った。とはいえ、前回までもアジア史をテーマと掲げながら、アジア・ヨーロッパの関係を扱っていた。今回もコーディネイターは前回同様、桃木先生である。ヨーロッパ史といえども、あくまで前回までの蓄積の上に行っているということは強調しておきたいし、ヨーロッパ中心史観とは違うヨーロッパの姿に出会える講座になっていた。うれしいことに今回は椅子が足りなくなるぐらいの大盛況であった。（最初ごたごたしてしまい、来場した皆様にはご迷惑をおかけしました。）

あと、今回、この報告（高校、大学の授業内容報告）を高校側の授業者が書くということも試みている。読んでいただければわかるが、自分の授業であるだけに例年以上に熱のこもった報告が揃っている。ぜひ読んでいただきたい。この講座は2018年度以降も継続して行っていく。ぜひさまざまな先生、生徒の皆さんに気軽に参加していただきたいと考えている。

7月31日（月）「大航海時代のイベリア半島とアジア・日本」
講師 岡美穂子（東京大学史料編纂所）　徳原 拓哉（県立鶴見高等学校）
8月1日（火）「北欧の近世国家」　講師古谷 大輔（大阪大学）　福 本 淳（栄光学園高等学校）
8月2日（水）「近世のイギリス」　講師 中村 武司（弘前大学）　真木 康彦（城北高等学校）
コーディネイター　桃木至朗（大阪大学）

7月31日（月）「下から見る」大航海時代のイベリア半島、アジア・日本

鶴見高校　徳原　拓哉

はじめに

今回の授業では、両授業者のリレー形式で、歴史を「下からの視点」で捉えなおすことを狙いとした。この目的は我々が普段の授業で使う「国家」単位の歴史の中に埋没してゆく人々を掘り起こすこと、そしてその枠組みを相対化することにある。イベリア半島内におけるユダヤ人の移動は主に徳原が担当し、大航海以後の動きは、主に岡が担当した。

1　イベリア半島のユダヤ人

イベリア半島のユダヤ人は、セファルディーと呼ばれ、ローマ帝国期以降、世俗権力と結びつきながら普遍宗教となるキリスト教に対して、離散（ディアスポラ）の民としてマイノリティ化した。　イスラームの進出からグラナダ開城の711～1492年は、共存の時代だった。

アンダルスの社会は、諸地方がそれぞれ総督により統治され、文化的・民族的にモザイク状だった。支配層のイスラーム教徒は少数派にとどまったため、宗教的な寛容が維持された。ユダヤ人たちは慣習を維持しつつアラビア語を学び、イスラーム社会に同化し、その文化を吸収した。

北部キリスト教国のユダヤ人たちは、アルハマと呼ばれる自治区に居住し、レコンキスタのための資金提供や、徴税、財政運営を担った。手形や計算の扱いに慣れていたため王権にとっては有益であり、特にカスティリヤ王国のアルフォンソ１０世はユダヤ人たちを重用し、トレドやセビージャではアラビア語学術書の翻訳事業が進んだ。

しかし、１３世紀には①トレドにおける翻訳事業の進展による、アリストテレス哲学の拡散と教会の硬直。②特権を多く得るユダヤ人たちに対する民衆の憎悪が高まり。③フランシスコ会やドミニコ会等、異端問題に積極的な会派の登場。④レコンキスタの進展。⑤ペストの拡散、といった要素がセビージャやトレドなどでユダヤ人虐殺を引き起こした。

これら騒擾は、ユダヤ人たちのキリスト教への改宗を促した。コンベルソと呼ばれた彼らは、キリスト教に同化するものと、ユダヤ教の慣習を守るか、ユダヤ教に回帰するものに分かれ、イベリア半島内に新たな社会集団を形成した。前者は改宗によって社会的地位の上昇を可能としたが、後者の存在が１５世紀に明るみに出ると、大きな問題となった。

2　コンベルソ問題の先鋭化

コンベルソ問題は、カスティーリャ・アラゴン連合王国のカトリック両王フェルナンドとイサベルの時代に先鋭化する。両王は、コンベルソ内における隠れユダヤ教徒の摘発を求める世論にしたがって、1492 年にグラナダを開城させると、ユダヤ人たちに改宗か国外追放を迫る追放令に署名した。

多くのユダヤ人は隣国のポルトガルへと移住した。ポルトガルにおいては 16 世紀にカスティリヤ王女との結婚によりユダヤ人追放を容認しながらも、経済や文化面での影響への懸念から比較的寛容な政策がとられていた。ポルトガルにおいて異端審問が強化されていくのは、16 世紀半ば、ジョアン 3 世の時代以後になる。これら異端審問所の整備は、重要な役割を複数指摘できる。

1 点目は、国家の前景化である。異端審問所の各地への設置を通して、具体的な権力装置を各地へ置き、領域全体に王権の影響力を広めていく過程は、近世における国家の集権体制の成立を、コンベルソ問題を通して考察することを可能とするだろう。

2 点目は、財産の没収である。岡によれば、近世的な軍事国家の維持に異端審問による財産の没収は一定の効果を得ていたという。

3 点目には、コンベルソの海外移住に伴った天文学や海図作成などの航海技術の流出、また遠洋航海や長距離間交易に対する出資の減少である。これは長期的にはイベリア半島の経済的な斜陽と、ベルギーやオランダといった低地諸国の繁栄に結びつき、「大きな物語」と接続を可能とするだろう。

3　コンベルソとイエズス会

大航海時代におけるアジア・日本での布教を担ったイエズス会は初期会員にコンベルソの割合が高い。高等学校の世界史教科書においては、対抗宗教改革の「尖兵」というイメージで語られるイエズス会は、岡によれば実態と剥離しているという。

彼らの翻訳技術や学識、資金はイエズス会士の中におけるコンベルソの重要性高めている。

我々が「スペイン人」「ポルトガル人」という類型の中でひとくくりにして語ってきた大航海時代の人々を、その人々の視点で丹念に拾い上げてゆくと、国家という枠組みにとらわれないトランスナショナルな歴史が浮かび上がってくるのではないだろうか。

8月1日（火）研修報告　夏の世界史　高大連携講座　二日目　報告

栄光学園高等学校　福本　淳

私がかかわった第二日目のテーマは「北欧の近世国家」であった。高校側の教師に与えられた時間はちょうど50分。この状況で話すべき内容としては、①会場に集まった高校生（高校3年生が多い）のために該当テーマを使った大学受験対策的な内容を話す。②これに続く大学の研究者（大阪大学・古谷大輔教授、詳しくは後述）の講義ために、該当テーマの史実の概要を説明する。③可能ならば平易を旨とする高校の授業と、深く掘り下げることを狙う研究者側の講義を橋渡しするものとして、少しだけ踏み込んだ内容に言及する、以上3点ではないかと（私は）思う。そんなわけで、今回はまず、スウェーデン近世史に関する早稲田大学の法学部の論述問題を提示し、冒頭の数分間、高校生諸君にも考えてもらって導入部とした（解説は最後に行った）。その次に、私がかつて高3の授業で北欧史を講義したときに作成した穴埋め式のプリントを少し詳しくしたものを配布し、それに沿って話を進めた。主にカルマル連合から北方戦争をへて近現代までのスウェーデンを中心とした北欧史だ。さらに持ち時間の後半部分を使い、高校生たちのその後の世界史学習にも多少なりとも参考になり、また古谷教授の話を聞く上でも参考になるような知識として、「少し高度な歴史学上の概念を理解しよう」と題し、「近世国家とは何か」「帝国とは何か？」の二項目を手短に講義した。「近世国家」については、特に以前の世界史教科書ではマルクス主義史学系の学説である階級均衡論により説明される傾向があった。しかしこの概念は、社会が封建階級と市民階級の二大陣営に分かれて争ったなどなど、当時の社会構造を単純化するなど問題も多い。このため最近は、近世＝主権国家の形成された時期という説明が主流になっている。確かにそうなのだが、主権国家はウエストファリア条約で誕生したとも言われるように、どちらかと言うと国際政治史の目線からの用語であり、封建社会の終焉と言った単元後に持ってくると分かりにくい面もある・・・といった教える側の悩みをあえて生徒にぶつけてみるような展開とし、最後に解決案（？）として、軍事革命や財政軍事国家など、王権強化に関する新たな視角を紹介した。次に「帝国とは何か」と題して、世界史上における王国と帝国との違い（主として、多民族を統率するような巨大な権力が帝国と言われる）、世界史上の成功した帝国（アッシリアや秦のような強制性の強い帝国より、アケメネス朝、唐、オスマン朝など緩やかな統合をめざすような帝国のほうが総じて成功している）と言った話をしたうえで、バルト海帝国と呼ばれ軍事的に大成功した17世紀のスウェーデンもまた、ポメラニアやリヴォニアなどを緩やかに結びつけた「帝国」だったのではないかと結論した。最後に入試問題の論述に関する解法の説明をした。

これに続き大坂大学大学院言語文化研究科准教授古谷大輔先生のお話となる。古谷先生は、まず二つのエピソードを生徒たちに提示し、そのエピソードの意義や背景を読み解くために世界へ旅立つような、そんなダイナミックな構成で話を進めた。二つのエピソードとは（1）スウェーデン人は長崎の出島に来ていた！　（2）日本の蘭学者はスウェーデン人からオランダ語を学んだ？！　である。まず、（1）であるが、1647～48、52～53年に長崎出島の商館長を務め、その

後、台湾の行政長官に昇進したのち、鄭成功との戦いに敗れたスウェーデン出身のオランダ東インド会社の社員フレデリック＝コイエットである。また（２）の主人公となるのは、ケンペル、シーボルトと並んで「出島三博士」などと称される碩学・カール＝ペーテル＝テューンバリである。やはりスウェーデン出身の彼は、あの有名な生物学者リンネの弟子であり、リンネが動植物の調査のために世界に放った「使徒」と呼ばれる高弟の一人である。彼は医官として出島に勤務し、『日本植物誌』『日本動物誌』などを執筆した。テューンバリの江戸参府のさいに彼から語学や医学の手ほどきを受けた日本人の中には、『解体新書』の翻訳にも参加した桂川甫周や中川淳庵がいる。当時のオランダ東インド会社は、実に多彩な人材をヨーロッパ各国から引きよせていたのだ。またコイエットの家系を遡ると、もともとはブラバント地方の金細工師の一族であり、宗教改革にさいしてカルヴァン派となり、宗教弾圧を受けてスウェーデンに移住、先祖代々の技術を使って鉱山経営に活躍して認められたというストーリーをもつ。こうしたことから以下のようなことが読み取れるのだ。すなわち、スウェーデンはバルト海帝国となった時期にも、自らの持つ巨大権力の正当性の根拠づけに苦心していた。なぜならスウェーデンはハプスブルクやロマノフのようなローマ帝国の栄光を受け継ぐ勢力ではなかったからだ。そこでスウェーデンでは、自民族こそがノアの直系の子孫であるとする説が取りざたされた。これを「立証」するために博物学も発達した。また、あまり農業向きの気候風土でもないスウェーデンでは有用な資源の探査に熱心だったことも、この傾向を強めた。こうした風潮の中、スウェーデンの最高学府ウップサーラ大学の出身者たちは世界をまたにかけて活躍し、様々な就職先を見出してもいったのだ。近代国民国家が出現する以前のヨーロッパ君主政諸国家では、19 世紀以降のような国籍概念は希薄であったことも、かれらウップサーラ学閥の傑物たちには有利に働いた。また、当時のヨーロッパでは軍事革命が進行していたので、こうした能力主義的な空気もコイエット家のような流浪するテクノクラートたちにも追い風として作用したのである。江戸時代の日本におけるスウェーデン人の活躍は、こうした様々な風潮の終着駅のような現象だったといえる。壮大なパノラマを見るようなお話、また声の大きさに強弱のメリハリをつけて熱心に話される古谷先生の講義に、生徒も大いに魅了され、感銘を受けたようであった。

最後になったが、今回の高大連携三日間、会場を提供してくださった横浜商業高校の智野先生と生徒の皆さんには本当にお世話になった。横浜商業の生徒さんたちは朝会うと、元気よく挨拶を返してくれて、この学校が礼節を重んじた充実した教育を実践されているということがよくわかり、頭の下がる思いであった。改めて尊敬と感謝の気持ちをささげたい。

8月2日（水）近世のイギリス ～ 複合国家の形成

城北中学校・高等学校　　真木　康彦

序　イギリスの名称（「連合王国」の意味）

グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国(United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland)という名称は、イギリスがイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの連合国家であることを示す。近年でも４地域の差異を示す事例は多い。1999 年にスコットランド自治政府が成立し、1707 年の議会合同以来 292 年ぶりにスコットランド議会が復活して大幅な自治権を獲得した。2011 年には、独立推進派のスコットランド国民党がスコットランド議会選挙で過半数を獲得し、３年後の住民投票では分離反対が上回ったものの、独立賛成も 44.7%の得票を得た。2016 年、イギリスがＥＵ離脱を決めた時も、全体は離脱賛成 52%、反対

48%、イングランドでは賛成 54%、反対 46%だったのに対し、アイルランドでは賛成 44%、反対 56%、スコットランドにいたっては賛成 38%、反対 62%と、大きな地域差が表れた。

本報告は、ピューリタン革命期に成立したこの複合国家体制の形成過程を整理したものである。

1　中世のイングランド

プランタジネット朝の創始者ヘンリ２世は、イングランド王位に就いた後アイルランドへ侵攻して植民を進め、ローマ教皇からアイルランドの宗主権を認められた(1171 年)。

エドワード１世は、ウェールズを併合して(1284 年)皇太子をウェールズ大公とした。イギリス皇太子の称号を現在でも The Prince of Wales(ウェールズ大公の意味)というのは、これに由来する。さらにエドワード１世は、スコットランドにも侵攻して支配した(1296 年)。

2　近世のイングランド

①テューダー朝　テューダー朝の創始者ヘンリ７世はウェールズ出身だったので、ウェールズのジェントリは忠誠を誓い、ウェールズのイングランド化が進んだ。

次のヘンリ８世は、ウェールズに辺境評議会を置いて支配を強化し(1534 年)、合同法を制定してウェールズ法を廃止(1536 年)、さらに第２次合同法(1543 年)でウェールズを併合した。16 世紀のイギリスは「２人の王＝イングランド王(ウェールズとアイルランドも支配)とスコットランド王、３つの議会＝イングランド議会(ウェールズを含む)、アイルランド議会、スコットランド議会」で構成されていた。イングランドに併合されたウェールズでも、意識・文化の面では独自性を維持していた。

②ステュアート朝　1603 年、スコットランド王ジェームズ６世がイングランド王ジェームズ１世となり、両国は同君連合となった。彼はスコットランドとイングランドの統合を目指し、さらにアイルランドでは土地収奪を進めた。

次のチャールズ１世は、カルヴァン派の長老教会体制が確立していたスコットランドに国教会を強制して反乱を招いた(1639 年)。またアイルランドでも、新規課税などの圧政をしいて反発を買い、ジェームズ１世時代には進展しかけた複合国家体制は解体の危機に陥った。

③共和政　クロムウェルは、カトリックである前国王の皇太子(のちのチャールズ２世)への忠誠を表明したアイルランドに侵攻し、征服した(1649 年)。この時、ゲール人から没収した土地をロンドン商人らに与え、アイルランド全土の４割がイングランド不在地主の所有となり、アイルランドの植民地化が進んだ。またクロムウェルは、スコットランドが、のちのチャールズ２世を新王と認め忠誠を誓ったので、ここを征服した(1649 年)。ピューリタン革命の重要な結果の一つに、この時期に複合国家体制が形成されたことがあげられる。複合国家体制の特徴は、１．国王の専制でなく、議会によって複合国家を実現した。２．国教会を強制せず、プロテスタントの複数の教派を容認した。３．アイルランドにとっては征服だったことの３点である。

③ステュアート朝　アン女王の時に「グレートブリテン王国」が成立した(1707 年)が、この合同は、イギリス議会の定数を増やしスコットランドに割当てる議会合同の形をとった。

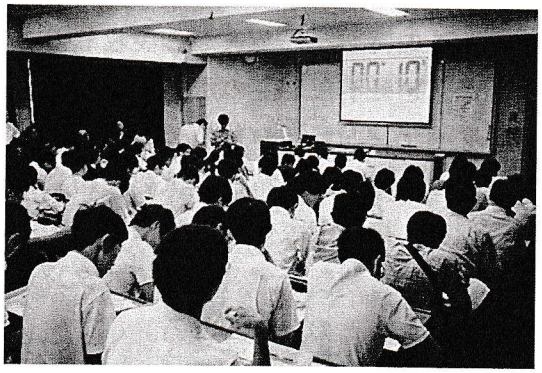
④ハノーバー朝　イングランドはアイルランドを併合して「グレートブリテンおよびアイルランド連合王国」となった(1801 年)。

8月2日（水）近世のイギリス
―「イギリス」「帝国」「イギリス帝国」の意味や由来―（中村武司）

報告　中山拓憲

中村武司先生の授業は、何気なく私たちが使っている用語がどのように生まれ、どのように変遷していったかを深めていく授業であった。報告者の印象に特に残っているのは、日本でイングランド、もしくはグレートブリテンがイギリスになった由来についてである。ジェイムズ1世から日本への親書をウィリアム・アダムズ（三浦按針）が日本語に直した。その際、アダムズは、なんと当時日本に影響の強かったポルトガル語を取り入れて「いきりす（いぎりす・英吉利）」と表記したという。

また帝国や皇帝という用語は、もともとラテン語の imperium、imperator に由来するそうだ。Imperium（インペリウム）は命令権・指揮権、そこから命令が及ぶ範囲ということで支配権という意味が生まれたとのこと。Imperator（インペラートル）は最高司令官、凱旋将軍程度の意味で、現在、私たちがイメージする帝国、皇帝とは違っていた。英語の empire も、海外の上位の権威・権力に臣従しない君主が支配する国、つまり主権国家を意味するとのことであった。私は、帝国とは多民族を支配する、または複数の王国を支配するような皇帝が治める国だと考えてきたが、どうもそこまできっちりしたものではないようである。アジアにおいても帝国という言葉が使われるようになったのは1814年に日本最初の英和辞典で empire の訳語として載ったのが初めてだったという。empire には複数の意味があるのであるが、単純化して使うようになったということである。

言葉の意味は、決して固定化されたものではないし、同じ言葉が使われていてもその内容が違うことは多々ある。しかし言葉を固定化した意味で使い、その言葉が使われるものは同じだと考えてしまいがちである。今回の授業を受けて、同じ帝国でも、その中身はかなり違うのかもしれないと考えた。

以上、3日間の報告である。今回の報告ではほとんど触れなかったが、会場では手を挙げて質問をする生徒が複数見られた。午後の協議も活発に行われ、有意義な講座になったと思う。